

◎ **2004年度修了おめでとう！**

4期生のグエン テー キム フォン(国際社会研究専攻)さん、李 華穎(国際社会研究専攻)さん、馮 億俊(国際文化研究専攻)さんの3名が、9月30付で国際学修士の学位を授与されました。無事修了され、本当におめでとうございます。留学生の修士論文執筆、お疲れ様でした。今後は、日本と自国との掛け橋にならんことを祈念します。これまでの修了生は、国際社会研究専攻者60名、国際文化研究専攻者48名の合計108名です。

◎ **着任教員紹介その5**

松尾昌樹講師(Matsuo Masaki)

- ① 専門：湾岸アラブ諸国の歴史叙述とナショナリズムの研究
- ② 前職：東北大学国際文化研究科教務補佐員
- ③ 趣味：家事

自己紹介：同窓会の皆様、はじめまして。現在の中東情勢は混沌としており、この地域は日本人にはなじみがないこともあり、さまざまな意見・憶測が飛び交っています。また、日本がイラク問題に直接関わるようになってから、感情的な反米や親アラブの論調が目につくようになり、冷静な分析が見失われつつあります。本学では、学問的な分析を通じて、中東・アラブ地域を切り口に、自分達とは異なる社会に対するまなざしを養ってゆく方法を、学生とともに模索してゆきたいと考えています。今後ともよろしく願いいたします。

◎ **国際学研究科・地域研究コンソーシアム(JCAS)主催 宇都宮大学国際学部10周年記念公開講演会開催 中東の現在を考える—イスラームをめぐる文明の衝突は不可避か**

東京外国語大学助教授、飯塚正人先生をお迎えして行われた本講演会は、本年4月に発足した地域研究を行う研究機関の組織、JCAS主催の最初の講演会だそうです。また本学国際学部の10周年にもあたるようで、なんともめでたいことづくめの講演会となりました。どうも一部授業で本講演会参加を出席として扱うものもあったようですが、ほぼ満員の会場は熱気にあふれたものとなりました。

飯塚先生はこのところ、テレビでもよく拝見していました。イラクやパレスチナ情勢の分析をニュース番組などでされており、テレビ出演の裏話をユーモアたっぷりに語られていました。

講演のタイトルにもありますように、まず有名なハンチントンの「文明の衝突論」の評価から語られていきました。このとかく議論が戦わされた「文明の衝突論」ですが、中東から見れば、「極めて優れた理論」、だそうです。とりわけ、「文明の異なる国家や

グループのあいだで暴力闘争が起これば、それはエスカレートする(略)。同じ文明に属する他の国家やグループが力を合わせて同類国を支援する」という部分の、「グループ」がポイントで、これによって、近年のアル・カーイダ等の反米テロリズムも的確に言い当てている、とおっしゃっていました。

イスラーム「原理主義」とテロリズムの違いも興味深いお話でした。近年のテロリズムは、テレビを見て、ボスニアなどの「ムスリムの受難」に危機感をもった若者が、直接武装組織に参加する、すなわち普通の市民がテロリズムに参加している可能性が高いそうです。そうした人間は、イスラーム的価値の実現を、国家に要求する運動を行う「原理主義者」でもない、ということでした。

そして本講演の議題、「文明の衝突は不可避か？」という疑問に対しては、アメリカ国民が海外に関心を持たない限り不可避かもしれない、ということでした。またテロリズムに関して言えば、『「対テロ戦争」とは言っているが、犯罪根絶が不可能であるように、テロリズムを根絶するのは不可能である。重要なのは、ムスリムの若者の危機感を煽り、テロリズムを助長するような行為を慎むことだ』とおっしゃっていたのが、先生の結論のように思えました。

後期から「西アジア論」を担当される松尾昌樹講師がコメンテーターをされ、「文明の衝突」論には否定的な意見も見られるが、有効な理論であり、そうした見地から現代の問題について考えることが重要である、という意味のことをおっしゃっていました。

筆者は現在、現代トルコ政治におけるイスラーム政策にスポットを当てて研究しています。なぜトルコ国民が直接、利害関係のないボスニアやコソボにあれほど関心を抱いたか、またトルコで起きた反米デモの意味、などについて示唆をうけたように思われました。ちなみに飯塚先生はメールアドレスを公開されており、質問にはできる限り答えるようにしているとのこと。是非質問してみてください。

(取材記事：国際社会研究専攻 2年 藤田敏文)

◎ 国際学部だより

地域貢献特別支援事業「日光における朝鮮通信使記念行事への支援と国際交流」にかかわる公開講座およびスタディツアーが開催されます。

第3回公開講座 **日朝友好の関係史を見直す** —朝鮮通信使の意義—

日時：2004年12月4日(土)午後3時～5時 講師：仲尾 宏氏(京都造形芸術大学教授)

場所：日光市交流促進センター研修室 (日光市戸野 2854 電話 0288-54-1013)

第4回公開講座 **朝鮮通信使と現代の日韓交流**

日時：2005年1月29日(土)午後1時30分～6時

第一部：「**雨森芳洲および朝鮮通信使の顕彰事業と現代の東アジア交流**」

講師：平井茂彦氏(滋賀県高月町・東アジア交流ハウス「雨森芳洲庵」館長)

第二部：「**韓国からみた朝鮮通信使**」

講師：孫 承喆氏(韓国・江原大学教授、韓日関係史学会会長)

場所：日光市交流促進センター研修室 (日光市戸野 2854 電話 0288-54-1013)

第3回スタディツアー 「県内の絵馬に見る朝鮮通信史の姿」

日時：2005年1月30日(日)午前9時～午後5時(予定)

見学地：栃木市出流町満願寺・佐野市沼鉾神社・小山市大川島神社等(貸切りバス利用)

講師：佐藤権司氏(今市市) 参加無料(ただし入館料、昼食等は各自負担)

定員 35名(先着順。往復はがきにて申し込み)

申込先：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350 宇都宮大学国際学部 佐々木史郎宛

締切日：2005年1月11日(火)

問合せ先：宇都宮大学国際学部・佐々木史郎研究室(電話・FAX 028-649-5222)

E-mail: sasakis@cc.utsunomiya-u.ac.jp

◎ **掲載記事紹介**

現職の先生方の掲載記事を紹介します。いずれも、下野新聞です。

2004年9月5日(日)「学問のススメ⑬-柳宗悦の木喰上人発見」岡田三郎教授

2004年9月6日(月)「栃木から世界をのぞく 61-ローカル・コモンズ」柄木田康之教授

2004年9月27日(月)「栃木から世界をのぞく 63-内発的発展」阪本公美子講師

2004年10月18日(月)「栃木から世界をのぞく 65-異文化適応」友松篤信教授

◎ **平成17年度大学院9月入試合格発表**

国際社会研究専攻は、一般選抜9名・社会人2名・外国人1名の計12名です。国際文化研究専攻は、一般3名・社会人2名の計5名です。新専攻の国際交流研究専攻は、一般1名・社会人1名・外国人1名・国際交流・国際貢献活動経験者特別選抜2名の計5名です。総計22名でした。

◎ **第3回目各学部等同窓会と宇都宮大学との打合せ会について**

日時：平成16年12月11日(土) 午後1時30分から

場所：宇都宮大学 第2会議室(本部3階)

議題：「各学部等同窓会の連合体組織について」と「課外活動共用施設建設事業資金への協力のお願ひ」について

研究室訪問 04 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第4回目には、昨年から今年にかけて、アメリカで研究生活をされた地球文化形成研究講座所属の中村真先生にお願いしました。

中村 真

私の研究テーマは、「表情を介した感情のコミュニケーション」である。特に、文脈情報(たとえば、年齢や性別など自分や相手の属性、相手と自分との関係、状況の公私の違い

など)がコミュニケーションにどのような影響を与えるかに興味があり、似たような感情経験であっても文脈によって表情への表れ方が違ったり、同じような表情でも文脈によってその解釈が異なったりするといったことについて研究している。国際学部では、卒研究生と一緒に実施した研究も含めて、感情の表し方についての比較研究(日米、日中、高齢者と大学生の比較など)、ワールドカップでの選手の笑顔の比較、味覚刺激と表情の関係などをテーマに研究してきた。

ここでは、昨年度の在外研究員制度によりアメリカ合衆国のコネチカット大学において研究を行う機会を得たので、簡単にその報告しようと思う。昨年8月から本年6月まで、感情コミュニケーション研究の第一人者であるコミュニケーション・サイエンス学部の Ross Buck 教授に主としてお世話になり、同時に、心理学部の David Kenny 教授にもデータの分析方法を中心にご支援を受けた。この大学は、ボストンとニューヨークのちょうど中間に位置する州立大学で、閑静なというか、完全な山の中にある。勉強、研究に没頭するには理想的な環境といえるかもしれない。ちなみに、周辺の道路では、リス、スカンク、ラクーンなど様々な動物がセンベイになっていた。たまたま小学生の娘が借りてきた理科の参考書を見たところ、近所の道路を調べてどんな動物が死んで(住んで)いるのか観察してみよう、というような項目があった。

さて、この山の中の大学で、アメリカ人大学生を対象に、ビデオに録画された表情とその録画された人が見ていたスライド刺激をペアにして見せて、表情とスライドからその人の感情について判断してもらう実験をした。実は、この実験を計画するに当たり、大学における人権保護委員会のような組織の審査を受けなければならなかった。この審査は、私が客員研究員だからというわけではなく、分野を問わず、人間を対象にした全ての調査や実験の計画に際して必要とされるもので、学生が授業の課題で研究しようとするときにも必要である。審査を受けるに当たり、どのような刺激をどのように被験者に提示するのか、被験者は実験に参加することによってどのようなメリットがあるのか、どのようなリスクがあるのかなど、細かく説明した申請書を作成し、提出した。このような制度が整えられた背景には、以前医学部の実験でトラブルが生じたことがあるらしい。このあたりは訴訟の国と言われるアメリカらしいところであり、見習うべき点もあると思った。が、いくら待っても返事が来ない。いつの間にか一月ほどの時間が経過してしまったので、共同研究者と相談して催促したところ、申請書がオフィスの書類に埋もれていたということであった。これは見習うべきではない点であろう。その後は審査委員会の助言に従って申請書を修正して許可を得ることができ、無事に実験を行うことができた。

実験の結果、何を見ていたかより、どんな反応をしていたか(表情)の方が判断の手がかりとして重要であるということが確認されたが、男性よりも女性で表情を重視する傾向が強いことなど、性別などの要因も判断に影響を与えていることが示された。今後は、日本でも実験を行い、日米比較に発展させていきたいと考えている。研究の詳細については第一報として国際学部研究論集に投稿したので、興味をお持ちの方は参照してもらいたい。

なお、先生のエッセイ「アメリカの『好景気』ーコネチカット州にて」が『学園だより』のNo.69(2004年4月号)で掲載されています。

知究人 03 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第12号の第3回目は、国際学部4期生の石原庸兆氏です。

「仙台から」

石原 庸兆

私は宇都宮大学国際学部を平成14年3月に卒業し、現在東北大学大学院(以下東北大・院)国際文化研究科博士後期課程に在学しています。

東北大・院国際文化研究科は宇都宮大学国際学部と創立の理念や経緯が似ており、人文科学、社会科学のみならず自然科学系の講座にまたがり、学際的な知的刺激にあふれた雰囲気のもとで研究ができる研究科です。実際に、宇都宮大学国際学部出身者が比較的多く、期せずして仙台で偶然の再会を果たしたということも何度かあります。

さて、私の専門は言語学ですが、東北大・院国際文化研究科は特に現在、21世紀COEプログラムが採択され、大変研究に望ましい環境が整備され、全国でも屈指であるといつて過言ではないほどです。これは、国際文化研究科のみならず、東北大・院の文学研究科、情報科学研究科、工学研究科、医学研究科などにまたがる世界でも有数の意欲的な試みです。言語の普遍性と多様性、そしてその言語以外の一般的な認知的能力との相関、ひいてはその生物学的・医学的な基盤という壮大なテーマに、これらの諸専門の教員・院生が一丸となって取り組んでいます。

例えば、一般的な言語学といっても、一般にこれまで相互交流が十分なされていないとされてきたチョムスキー系の生成文法理論とそのアンチテーゼ的性格の強い認知言語学理論との統合がそれぞれの第一人者によって試みられ、また世界的に大変特徴の見られる諸言語の専門家(日本、中国、ヨーロッパはもとよりインド、アフリカ、オーストラリア先住民諸語)が豊富なデータを提供して理論を発展させています。さらには一般的な認知心理学の実験や、工学的・情報科学的なアプローチ、ひいてはfMRIと呼ばれる脳内活動を可視化できる装置を用い、脳内の血流測定などで医学的に言語活動についてアプローチしています。予算的にも大規模な金額が組まれ、院生レベルでも金銭補助が受けられ、学会出張などもかなりの額が支給されます。

このように、どれ一つをとっても世界最先端のアプローチがとられており、少しでもこれらの領域に興味があれば垂涎的となるすばらしい環境です。

私自身に関して言えば、もともとの興味関心は伝統的な歴史言語学・文献学でありましたが、自身の研究を発展されていくためには、近年の理論言語学が自然科学的なアプローチを導入する必要があると考えておりましたもので、大変こちらの環境はすばらしいものであると考えました。

宇都宮大学国際学部の卒業論文では、古代の朝鮮半島の言語状況について、東アジア的な視野から考察を加えました。修士論文としてはこれまでほとんど記述・理論的考察のなかった二重使役構文現象(XがYを通じてZに何かをさせる)について韓国語・モンゴル語・日本語について記述するとともに、通時的な文法体系の変遷、そして言語能力の基盤となる人間の認知能力の観点から説明を与えました。まだまだ記述・理論的にも発展性のある分野で大いに研究を進めていきたいと考えています。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2005年の冬を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回、第12号に寄稿をお願いしたのは、現役の北島研究室・竹内幸子です。なお、カナダのヨーク大学で日本語教師に携わっている文化の小池研究室 OG・イワノワ・ゲルガナさんの原稿は、筆者のご都合により次号以後に掲載の予定です。

◎ 6期生近況報告

まちづくり研究グループ「ホッと・雷都・HOT」とは

国際学研究科1年 竹内 幸子

今回、「ホッと・雷都・HOT」の活動紹介を、ということで投稿の依頼を受けました。「ホッと・雷都・HOT」をより多くの方に知っていただける機会であると考え快く引き受けたものの、構想が浮ばず原稿提出期限に迫られパソコンに向かっている次第であります。指導教官から「腰が重い」などと言われますが、まさにこのことだと痛感しています。

さて、そんなことを言っても進まないの、早速「ホッと・雷都・HOT」の紹介に入りたいと思います。先程から何度も「ホッと・雷都・HOT」という言葉が羅列しておりますが、「一体なんの事だ?」と思われている方も少なくないと思います。簡単にいうとまちづくり研究グループのことで、今年5月に発足したばかりの団体です。本グループは宇都宮市中心市街地活性化を目的としており、特に日野町商店街を中心に活動しております。日野町商店街は、オリオン通りの東側に位置する宇都宮で最も伝統のある商店街ですが、人通りが少ないなど中心市街地空洞化が顕著であると言っても過言ではない通りです。この商店街では毎月第4日曜日にイベント「ひのまちルネッサンス」を行っており、そこでストリートショップの一つとして参加させて頂いています。具体的な活動は宇都宮大学農学部附属農場で採れた新鮮野菜や果物の販売です。なぜ宇大農産物活用を考案するに至ったかということですが、ちょうどその頃、田村明著「まちづくりの実践」という本に出会い、読み進めていくうちに「そういえば宇都宮で何か活性化策たるものを試みている所はあるのだろうか?きっと宇都宮ではやっていないな。だったら自分がやってみよう!」と思い、そこで浮んだのが街中での宇大農産物販売でした。しかし、実際には中心市街地でイベントを行うなど活性化に向けて様々な試みがすでに成されていたのですが・・・

このようにして半ば思いつきで始まったホッと・雷都・HOTですが、実際に活動してい

くと農場側との交渉や販売場所探しなど一筋縄ではいかないことも数多くありました。しかし、交渉が難航すればするほどやる気というものは駆り立てられるもので、不思議とメンバー間の団結力も強いものになっていきました。思いつきとは言っても自分で言うのも何ですが、内に秘めたものは強く「学生だから卒業すればそれで終わり。期待はしていない。」と思われるのは癪だし、また一過性のイベントではなく連続性のあるものにしたいという思いは強くありました。

そんな中、日野町通りで毎月1回「ひのまちルネッサンス」というイベントが開催されていることを知り、そこで私たちも活躍できないかとお願ひしたのが日野町商店街で活動することになったきっかけです。このようにしてホッと・雷都・HOTの活動が始まったわけですが、実際の農産物販売は7月から始め現在まで7回、毎回完売で終わることができています。

まちづくりの実践としてホッと・雷都・HOTの活動を行ってきているわけですが、これをきっかけに地元商店街の方々と直接的な交流を図ることができるようになってきました。私達にとって農産物の完売というのは次回の活動資金になるため重要ではありますが、やはり地元商店街の方々と交流するということは何よりも貴重であると感じております。地元の方と話をすることによって日野町の実態というものが見えてくる場合も少なくないですし、商店街の方々の考え方も少しずつ知ることができます。このように実際に日野町通りに立ち、農産物を販売することによって統計資料では読み取れないことを発見することができるわけです。ホッと・雷都・HOTの活動を通じて得られるこのような貴重な財産を無駄にしないためにも息の長い活動を続け、日野町商店街活性化に貢献できればと考えております。そして、いつの日かイベントがなくても日野町通りに賑わいが戻ってくることを願って、ホッと・雷都・HOTの紹介を終えたいと思います。

@ホッと・雷都・HOTのホームページを開設しましたのでご覧下さい。

URL <http://www.geocities.jp/hotrait/>

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第6期在学学生)

今号は編集人の都合および執筆者との連絡不手際で、大幅に遅れましたことを原稿執筆者の皆様にお詫びいたします。さて、知求会ニュースも、無事3年目を配信することができました。これまでの原稿執筆者の皆様、ありがとうございました。あいさつが遅れましたが、新年のご挨拶ならびに寒中お見舞い申し上げます。

編集後記：限られた時間でニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
